

## 櫛ヶ浜俳諧史

会員 竹島 美 雅

はじめに

櫛ヶ浜の俳諧については、「徳山俳諧史」(河村漣<sup>※</sup>月著・昭和三〇年)に、「櫛ヶ浜及び地方俳壇」としてわずかに

洛の公成門下で櫛ヶ浜小林笠水及び自笑がある。宮市の素兄室積の閑雲等と共に万延三十六家仙の列に入っている。

とあるのみで、その後の「山口県近代文学年表」・「ふるさと櫛ヶ浜」の櫛ヶ浜俳諧についての記述もこの記述をもとにし、その範囲を出ていない。又「徳山市市史」においては、旧市内以外の俳諧史については全く触れるところがない。

従来櫛ヶ浜俳諧を物語るものは、原江寺の門前にある馬来・芭蕉・笠水の三基の句碑以外には無かったためである。

最近、櫛ヶ浜富永家(富永酒場)・村井家(旧問屋)に

それぞれ富永如水・村井梅谷発句集と当時の俳諧関係の数の文書があることがわかり、これらにより前記の句碑に肉付けができ、句碑の再検討と相まって、櫛ヶ浜俳諧人は天保期以降京都俳壇においてその名を知られた梅室・九起・公成・良大・素兄等と直結した深い交わりがあったことがわかった。又富永家の蔵書の中にあつた須々万「観翠舎(城)追悼句集・四季の華」により同地区にも優れた俳人が居たことがわかった。今後新たな資料の発見は望み薄と思われるので、現在までの研究結果を「櫛ヶ浜俳諧史」として発表したい。徳山市周辺地区の俳諧史研究の参考になれば幸である。

一 原江寺と句碑

原江寺は、櫛ヶ浜駅のすぐ北側にある小高い山にある曹洞宗の寺である。天文一五年繁翁宗茂大和尚により開山さ

れ、明治四年までは洞庭山吸江庵といわれていた。原江寺に登る階段の右側に石垣をもって整地された一区画があり、その中に三基の句碑がある。中央に馬來、左に芭蕉、右に一際大きい笠水の句碑が整然と並んでいる。いずれも、その弟子達が先達の功績をたたえて建てたものである。

前記の二人の句集をみると、洞庭山は信仰の山としてだけではなく、花見行楽・風流の場所としても人々が集まった山であったことがわかる。全山桜におおわれ、眼前に遮るものもなく展開する海島の景色は絶佳であったであろう。当時の俳人は、句碑・奉額に託して自らの上達を願ひ、その上達ぶりを人々に披露したのであろう。

吸江庵開帳奉納桜の通題 富永如水

山の家を 人で埋たる さくらかな

花守の 寝てみるあめの 桜かな

洞庭山花見 村井梅谷

後え向 しても真向や 花の山

芭蕉の句碑

名月や 門にさし来ル 潮がしら 翁

この句は、芭蕉が元禄五年江戸深川芭蕉庵の実景を詠んだ句であるが、幸田露伴はこの句を賞して「ふだんは門に及ばぬ潮が、この時まんまんと門にさし来るのだ。空には

満々たる月があり、門には潮がみなぎって来る。句に活動がある。堂々たる佳句である・・」といつている。洞庭山の実景に最もふさわしい。この句を選んだ櫛ヶ浜の俳人達の心が偲ばれる。

## 二 文政・天保期

馬來句碑・芭蕉句碑と富永如水発句集

### (一) 如水発句集

芭蕉句碑建立者の一人であり、馬來句碑由来の証言者でもある如仙改メ如水翁の句集から紹介しよう。

櫛ヶ浜西本町富永酒造の祖先

某築院釋瑞翁如仙居士 善作誠明 安政五年十月十日没

の句集は、

父の三十三回忌に

光陰ハ行水と供に待てふ事を聞ず

されバ愚父身まかりていつしか

屋霜を積り三十三とせのけふとハ

なりぬ その宮の折から何がし世の

恩愛深き事を思ひいだし靈前へ

迎ひ拙き一章を奉りぬ

我鬢の霜を手向ん三十三とせ

から始まり

老の松そのふりもなきミどり哉  
に終わる。句の数凡そ三百。

(二)馬来句碑

①句碑 高一〇〇〇・幅五五〇・厚三五〇

正面 白萩の 地につけば夜の 明けにけり 馬 来

側面左 天保庚子秋(一一年・一八四〇)平安東山九起書

裏面 連中同翁石

②発句集より

馬来居士ミまかり給ひていつしか

十あまり七とせのけふとハなりぬ

その宮あらん事をほのかに聞て

不圖 不可思議の光り咲そふ桜と

吟せられしを思い出しくり返くり

返しつつ愚案の一章を綴りぬ

夢の世や今も桜ハそれながら

③句碑の由来

馬来翁の一七回忌に当り、その門人筋で同じく翁と言

われる年齢に達した俳人達が、馬来翁の供養のために

建立したものであることがわかる。

④馬来は誰か

伊ヶ崎(府野屋)利助 文政六年二月(一八三三)没

櫛ヶ浜本町の伊ヶ崎家には、馬来は同家の祖先である  
との伝承があり、利助翁の一七回忌は天保一〇年に当る。  
句碑が翌一年に建立されたことは、次の芭蕉の句碑が  
一五〇回忌の翌年天保一三年に建立されたこととその軌  
を一にする。

馬来句碑は、文化・文政期にはすでに櫛ヶ浜において  
も俳諧が行われていたことを証言する。

(三)芭蕉句碑

①句碑 高一六〇〇・幅一一〇〇・厚三〇〇

正面 名月や 門へさし来る 汐かしら 翁

天保壬寅秋(一三年・一八四二)梅室素信謹書

裏面 村井 自笑 ①

小林 其笛 ②

中山 鼓水 ③

富永 如仙 ④

浜田 指月 ⑤

富田 梅里 ⑥

浜田 馬棗 ⑦

児玉 五濱 ⑧

②発句集より

⑤ 浜田氏初老蔵建を祝して

末たのし蔵もよハひも三千代草

① 村井氏の安産を祝して

千代までも春風にあへこの産子

① 五濱士の旅立を止めんとして

ころぶまで行ずとするや庭の雪

② 馬楽士の息元服ありしを寿ぎて

つとと伸梅の梢に春日かな

まだそれぞれにしれぬ若草 馬 楽

③ 浜田主長官を蒙りその嘉宴を催ふされしに郎も席上

に招かれ杯盃をかたぶけ戯ながら兄弟の信義を迎侍

りて

抜ぬ香をいく世伝へよひ寒梅

④ 小林大人賢子を迎へられしを祝して

接穂してなをも栄へよ桃の宿

⑤ 鼓水親君のたらちめ黄泉の旅におもむき給ひけれバ

嗚かし歎きの懐ひ思ひやりつつ愚案の一章ささげは

べりぬ

張りつめた力も落んちるさくら

⑥ 梅里の追悼

なき人をまたも覗くや青すだれ

③ 句碑の由来

芭蕉忌を弔ひて

かならずと時雨るる日なり十二日

芭蕉の一五〇回忌供養のため、裏面の八人の俳人が建

立したものである。先の馬来句碑もこの人達が建立した

のであろう。

④ 建立者の実名は

句碑裏面の八人の人物について、同時代天保一二年に

再建された櫛ヶ浜神社の鳥居・玉垣・狛犬・灯笼、原江

寺の影向の井戸・結界石等に刻まれている実名及び神本

正律篇「久米村神祠堂庵資料」に登場する人名役職名を

基に櫛ヶ浜本町筋の旧家の殆どを訪問調査し、その子孫

が櫛ヶ浜に現存する家については、その実名を確認する

ことができた。いずれもそれぞれの家の繁栄の基となり、

嘉永四年吉田松陰をしてその東遊日記において「……戸

石・櫛浜の諸地は皆煩劇の地なり」と言わしめる程発展

した櫛ヶ浜商人町の礎となった人々である。個々の人に

ついては本誌では略記に止める。

村井自笑 村井市左衛門芳栄 酒場元祖

六戸御役付

小林其笛 小林助五郎美武 年寄

富永如仙 前記の通り



の人であることがわかる。落柿舎との関係も伺われる。

芭蕉句碑は、天保期の櫛ヶ浜俳諧の記念碑である。

三 幕末・明治前期

笠水句碑・木鐘庵之碑と村井家(旧問屋)文書

(一) 笠水句碑・墓誌碑

①句碑 高一七〇糎・幅三一〇糎・厚七〇糎

この碑は元来句碑として建てられたものであるが、後に裏面に墓誌銘が刻まれ、墓誌碑ともされた。

句碑面 笠水翁

白妙の 雪の中なる 梅の花

さびしさの 限りに鳴くや 閑古鳥

むしの灯に 入りて遊ぶや 盆の月

ときすがら しぐれの霰 聞こえけり

緑天居良大敬書

明治第十六年七月廿一日

畹玉堂門人

②墓誌碑面 笠水翁墓誌銘

約二五〇字からなる漢文の銘文であるが本稿に關係ある部分のみを略記する。

名曰武、姓小林氏、通称樵二、號笠水、堂名耕玉堂、勸勉於耕作商業之意也

学正風俳歌于芭蕉堂公成、技日進名高一世國風社長三位

高松保實公擢任俳歌師範明治五季壬申某月也

十四季辛巳九月没、享年五十九、配村井氏玉心堂素兄不

遠東京而來請銘乃銘曰

防之為土 白壤黑墳 北山南洋 景如繡文

靈魂昇降 從彼白雲 耕田畹玉 永世慕君(繡文は刺繡)

陸軍中將從四位勲二等

三好重臣篆額

前佛蘭西國駐劄書記官

正七位厚東樹臣撰并書

小林笠水 りすいと読み、小林其笛の子 万延三十六家

仙の一人

夫人は村井自笑の娘・俳号は「みはへ女」夫

と共に俳人である。

(二) 木鐘庵之碑

防府天満宮の境内、酒垂公園の筆塚の左上の二〇坪余りの平地の端に笠水が建てた石碑がある。笠水翁墓誌銘に追悼詞を寄せた玉心堂素兄との交情が偲ばれる。

防府市の資料により紹介する。

木鐘庵之碑(篆額)

碑文（口語訳による）

木鐘庵は、むかし梶原景時が鎌倉を遁れて、長門の阿武郡の川上に隠れ住んだ頃、営み建てたという伝えがあつて、家の造りがたいそう古風に見えている。後に萩村の児玉氏の庭に移し置かれていたのを、明治元年に、横沼素兄がもらつて、又此所（天満宮境内）に持つて来たものである。それは何故かという、この宮に鎮つておいでになる神（菅公）は、風流文雅の主であるから、文雅風流を好む人の、時々集い所にさせようとしたことからであつた。今、櫛ヶ浜の俳人小林笠水という人が、素兄がこの庵を此所に持つて来て建てた功を、歳月がたつと知る人がないようになるかも知れないと、それを惜しく思つて、その訳を私に書かせた。……中略……素兄のしわざも笠水の情も、それぞれに面白いので、共にこれを朽ぬ石に彫りとどめておくのである。

明治二年二月

藤原芳樹撰

藤原惟一書

（背面）

法輪山十三世

権大僧都法印周圓高惠代

開庵

横沼栄三郎藤原素兄

建碑

小林助五郎源旦武

石工

長峯又吉平正矩

〔三〕 良大・公成・素兄について

三人とも、笠水句碑にその名が刻まれている人物あるが、櫛ヶ浜俳壇と密接な関係があつたことは村井家文書（後述）によつても明らかである。

① 緑天居良大 笠水句碑の書家

内海氏、京都の人、金玉山双林寺、芭蕉堂にも住む。

芭蕉堂七世。南無庵七世。蒼虬門。明治二五年没 年令不詳。

② 河村公成 （山口市史より要約）

山口中市の生まれ、三九才の時加賀の桜井梅室の門に入り、京都では成田蒼虬に学んだ。芭蕉堂五世九起の後を継いで、一七年間に及ぶ。世人芭蕉堂の中興と仰いだ。また南無庵六世も継いだ。文久・元治の年間長州藩士多く京に入って国事に尽し、俳諧にことよせて芭蕉堂に会した。公成もまた勤皇の志厚く、長州藩士と交わること

深かったので、慶応四年六月会桑浪士のために襲われて死んだ。行年六一。墓は京都双林寺にある。山口今市正善寺の門内真栢の老樹下にも供養塔がある。古鐘庵杉孫七郎は其羊と素兄とを合して周陽の三家と称した。(P 26写真参照)

### ③横田素兄

(防府市史より要約)

宮市今市の人、玉心堂素兄、もと商人であったが、性恬憚にして、産を治めず。天満宮春風楼下に庵を結ぶ。加賀の桜井梅室の門に入り、諸方を遊歴して尾道の物外博多の仙崖と交わり、玉心堂の号は仙崖の命名である。また木鐘庵の号もあった。芭蕉堂公成とは同門で深く交った。防長二州は専ら美濃派を宗としたが、素兄が正風を鼓吹するに及び靡然としてこれに赴き、門人は前後七百人に上った。明治一八年九月七日没した。享年八一。靈台寺(今満願寺)に葬った。

### ④村井家文書

櫛ヶ浜中町に村井家が二軒ある。本家、分家の関係にあるが、本家は前記の村井自笑、市左衛門を開祖とする酒造業の村井家である。その前に、分家で通称「旧問屋」という村井家である(当主は村井周作氏)。その村井家に幕末明治期俳諧を物語る数点の文書があることがわかった。年代

順にあげると次のとおりである。

### ① 文久三癸亥正月京師東山芭蕉堂中門建築其他修繕費出

金ノ件控 櫛浜浦 南星亭用

おそらく芭蕉堂公成から要請があったのであろう。中山鼓水・村井道守・むめ女・ツせ女・村井道暉・山本山・村井梅谷・村井而緑・浜田馬楽・磯村仁三郎・富士屋新吉等合計貳両と貳百文の拠出が記録されている。他に小林笠水も拠出したものと思われるが、果たして名目通りに使用されたのであろうか。

前記のとおり公成の芭蕉堂には、長州の勤皇の志士達がいしきりに集っていた時期である。このことと合わせ考えるべきであろう。

拠出者一一名の中で、前章の芭蕉句碑に名のあるのは僅かに鼓水・馬楽の二人である。

### ② 明治五年五月 芭蕉堂良大より村井道暉あて書簡 公成の遺軸の引取り要請、その額三〇両

復願書

今般草堂永久の仕法立に付

海下之社中集会被致

かねて川嶋茂介殿方に

預ケ置有之候先師公成翁



蔵軸売払の事と相成

都合二十三幅

現金三十両引当と相成申候

別紙値付は目利人へ

相頼為致候ひかへ有之付

写取懸御目候、尤当地

社中之うちほしがり候ものも

有之候得ども、おなじくは先師

遺物之儀に御座候に付、可成は

御地へ御とど免置被下候間敷哉

一応懸御目申候。尚笠水様

とも御談じ被成下、御不用之

品も御座候得ば外方へ御譲

被成候ても御求被下候得バ

先師に対し候ても、泉下の

よろこびいか計と奉存候

万々一思召と叶不申候得バ

玉心堂老人へ御わたし可被下候

尤委曲は老人能御承知之(玉心堂素兄)

ことに御座候、同老帰国のうへ

御聞可被下候、将、御意に叶ひ候得バ

甚勝手がましき願に御座候得共

右代金御取集のうへ御速達

被下度、左候得バ社中一統

之大慶、尚、早々仕法立に

え懸り可申候。此段幾重にも

御高考のうへよろしく御懇配

奉馳走候、且御不用の分は

御社中夫々御風施被成下

候得バ千萬辱仕合奉存候

前条、梅谷、松久御両様へも

御頼被申下候、相見可仕の處、何卒

尊様よりよろしく御鶴聲

御伝言可被下候、伏て奉頼上候

先は右御願まで

仍如斯御座候 頓首

さ月 芭蕉堂良大 花押

村井道暉様

櫛ヶ浜の俳人達は良大希望通り、三〇両で全品引取り、素兄立会いの元に分配した。櫛ヶ浜の俳人達が芭蕉堂の大きなスポンサーであり、公成もまたこれを多としていたことがわかる。

◎村井道暉（南星亭）

梅谷と同じく、自笑の分家、梅谷と兄弟、村井市之介子孫は防府在、万延二年の「難泲者救米手控」があることから、米問屋であったと思われる。

③ 明治一六年 句集 小築庵賞吟百章

美麗な布表紙の句帳に流麗な筆致で書かれた百の句と春湖の「莊嚴の春や佛もうめ桜」の句が収められている。当時三大家の一人とされた小築庵春湖の撰である。

百章の作者名は次のとおり。

（櫛ヶ浜）道暉・梅谷・而緑・吐雲・英秀・みはへ女・晴雪・一湖・楽山・蛙城・春朝（富田）半香（戸田）柳（富海）燕石・松濤・芝奥・長州（三田尻）善秀・鋤水（山口）仙外・志朗（花岡）喜代女（高森）淇竹

◎小築庵春湖

橋田氏、甲府の人、二一才の時江戸に出る。全国に行脚して名声があり、深川永代橋畔に小築庵を結ぶ。為山・等裁と共に三大家と称され、明治政府になって教部省俳諧教導職に任ぜられた。

明治一九年二月没、年七二。

④ 明治一六年から同二五年四季發句集 緑波草堂 梅谷

一〇年間の多くの句と、それらの点句をうけた宗匠の名、奉納句と額の奉納先、旅日記等が書かれており、こ

の頃の櫛ヶ浜俳諧の発展の様子がわかる。如水の如く櫛ヶ浜連中の消息を伝えるものは僅少である。

(1)梅谷と宗匠

梅谷は前記の良大・素兄・春湖の外、（豊後中津）一潮・（筑前福岡）無外・（豊後大分）其一・（東京）黒風・文岱・（群馬南橋村）桑古等から点句を受けている。これらの宗匠達は、俳諧行脚の途中櫛ヶ浜に足を留めたのであろう。

(2)句額の奉納先

洞庭山原江寺・居守天満宮・遠石八幡宮・防府天満宮・その外山口奉額・北野奉額・伏見奉額等とある。

原江寺奉納句

あたらしき扇の音や簾越  
休むさへ水の上なり水馬

窓よけて降て通るや村時雨

東雲を待声早し雪の鶴

居守天満宮奉納句

春 札かけた俣に過行野梅かな

夏 踏付た草を葉や苔清水

秋 浪高く見へて替るや秋の空

冬 ふりつもる雪に刀や松の枝

(3)旅日記

二三年寅旧四月伊勢おかげ参り道中記を記している。  
その一節、京都山崎にて

妙喜庵利久翁三百回忌に茶席を見物し短冊掛に秀吉公  
の直筆ニ「あのこえハなにてあろふな時鳥」と有之、  
利久翁の竹の花生自作也、其他古き道具沢山ニこれあ  
り

釜の蓋切手のうちやほととぎす

おわりに

本年はあたかも、最初の「馬来句碑」が建立されて一五  
〇年にあたる。三基の原江寺句碑と二人の句集がものがた  
るところを伝い得れば幸いである。(平成元年二月二十五  
日 例会発表)

※編者注

河村漣月とは徳山市河村秀吉氏のことである。河村秀吉  
氏については会誌No.10 P 42およびNo.11 P 43・45・47・50  
参照)



芭蕉堂公成遺品の扇面 (P 23 参照)